

一、まほろばセミナー やまとことばで生命の文化を科学する

(一) やまとことばの「ココロ」の語源説について

伴信友の『方術原論』によれば『万葉集』の山上憶良の鎮懐石を詠じた長歌に「弥許々呂を鎮めたまふ」と云ふ文句がある。これは神功皇后が三韓征伐のとき懐胎中でまさに臨月になり、お産を延ばすまじないに、筑紫の鎮懐石を抱き、その懐の字、即ち御腹内のことをミココロといふのであるとのことである。ここで御胎児であるが、原始日本語では腹内の物すなわち臓腑を通称したのである。信友は、ココロとはもと腹中に凝ごりて覚ゆる臓腑を伝えるにて、さて万づの事を念ひ知覚ゆるによりて、ココロに念ふなどといふ意味が出て来たのだといふ。現に自分の生国なる若狭の山里の人は、猪や鹿などを屠って其の臓腑のことをすべてココロと云ってゐると信友はいった。枕詞につづけていふムラギモのココロも「肝向う心」もココロを臓腑と解釈することに由ってよくわかると信友は考へた。これは「心」が内臓の働きによると考えられていたためである。『万葉』の歌の「ミココロを鎮めたまふ」とある文句が、『古事記』の方には「御腹を鎮め」となつてゐる。『古事記』に御腹となつてゐるから腹内のことをもとココロといつたとするのである。信友はかくてミココロをミハラ内また御懐として解いたのである。井上通泰博士の『万葉集新考』に於て、「ミココロは御腹なり」と注記してある。内臓としてのココロの究竟の語源は、益軒の『日本釈名』をはじめ大槻博士の『言海』に至るまでの新旧諸説いづれも凝るといふ意味だとしてあるのを採つてよかろう。『言海』には凝はコロといふ重言の約だとあるが、別に古くから凝をコホルといひ、連濁してコゴルといふ古語もある。煮コゴリだの、鯉や鮒のコゴリとある俗語もそれから出たのである。トコロテンの古名はコロフトであつたが、このココロも同じく凝の義である。(東亜語源志)

(二) 三木成夫の「胎児の世界」と「顔の科学」に見るデボン紀の鱻の上陸劇
生命記憶の再現(胎児の世界、P80～)と神話に見る日本の情景、鵜葦草葦
不合命の誕生(顔の科学 P154～)について

(三) やまとことばと漢字で量子物理学の謎の「重力」を考えるー高等生命体
に「重力エネルギー」のセンサーはないの!? →実はあるの!

漢字の「重い」と「動ごく」と「動力」と「エネルギー」と「潜在力」の関

係について考える

(四) やまとことばで生命科学の盲点に挑戦

やまとことばと内臓脳思考の復権

内臓脳とは嗅脳・大脳辺縁系と呼ばれる内臓筋肉のためのしくみのこと。大脳は嗅脳から発生発達する。これと関わりの深いのが大脳辺縁系で、これは帯状回海馬傍回、海馬回、扁桃核、乳頭核などの原皮質を総称する。この部は腸管内臓系の筋肉の動きとともに存在し、情動に深くかかわり、海馬は記憶の形成にかかわる。これが内臓記憶であり、心・肺・肝・腎を移植すれば個体内臓の好みの記憶のみならず、多くの事象の記憶もドナーから移植者にうつる。ここは内臓筋肉のシステムであるから、一般動物では脳を中心をなし大きく発達している。ヒトでは大脳の最下部や内部に押しやられているが、実は辺縁系ではなくて、脳と生命体の中心系なのである。この周囲の辺縁に大脳皮質が発達し、この周囲を覆ってしまったのである。脳の発生は、口の腸から成る単節動物の原索類のマボヤに顕著にはじまる。脳神経原器と口の腸の鰓と消化管の仲立ちをするのが、大きく発達した脳下垂体の原器である。マボヤの考えるしくみは、口の鰓腸筋と腹腸筋肉のうごきすなわちあえぐ様か喜んで動く様か酸素や養分の不足に苦しむかにはじまる。養分が満ち足りて、余った養分が蓄積され、次代を担う生殖物質が腸管周囲に満ち満ちして来た頃になって潮と月が満ちた時に、マボヤの生命体全体が喜悦のうちに生殖物質が海に放出されて、脳の前駆の働きも喜びに満ち足りて終わる。これが腸と脳の考えるしくみである。やまとことばで考えるということは、一言で言えば内臓脳思考ということであり、内臓腸管系感覚を研ぎ澄まして、物を人一倍深く考えようということである。それには原始脊椎動物の源のマボヤとフカのネコザメとヒトの体のしくみについて、やまとことばで考えて見た結果の一部を図説する。はじめに生命の象徴の勾玉を示す。これは心の象徴であり、胎児と内臓腸管の象徴である。三種の神器の一つの勾玉は糸魚川の剛玉で出来ている。ホヤを取水孔（口）と排水孔（肛）を結ぶ線で二分すると、左半球に口・鰓・下垂体・食道・胃・生殖腺が存在し、右半球に腸管・生殖腺・直腸・肛がある。一束の鰓に一つ心臓がつく。エイと鱧では舌筋と心筋が鰓腸内臓筋でできていて鰓を動かしつつ血液を鰓腺に巡らせる。鰓と肺の電顕像を比べると、ともに赤血球造血器官である。鰓にはないリン脂質の界面活性剤の分泌腺が肺には存在する。

大和心とサイエンス
万葉と厭戸

大和魂で重力を考える
重力進化学の樹立

基督教の文明の終焉

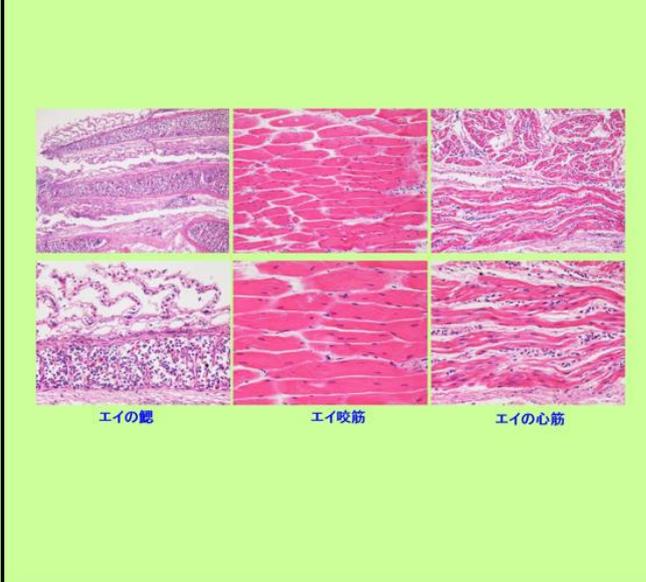
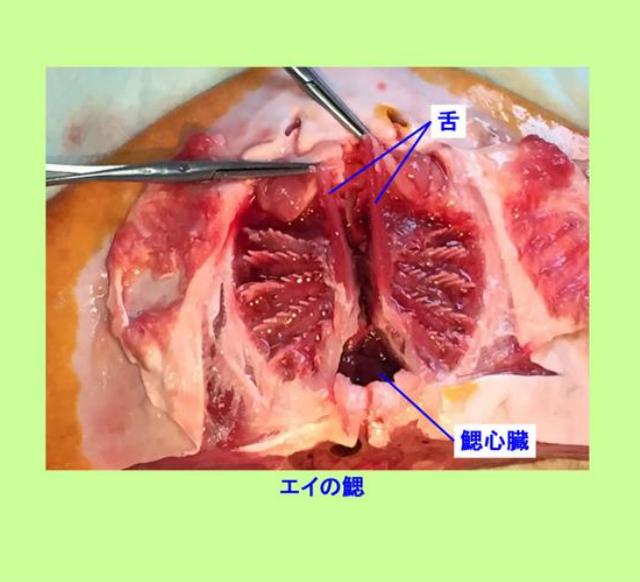
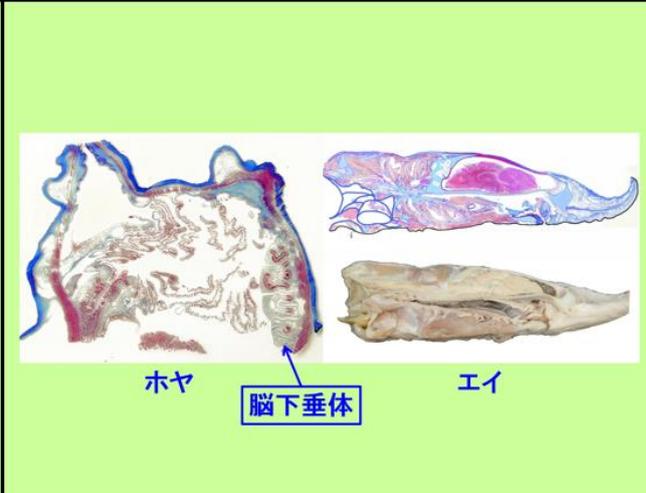
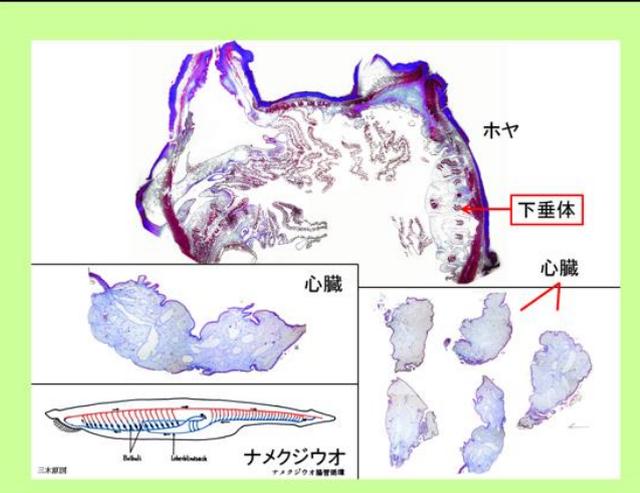
やまのこほにこほりて後のしのみをみる
内臓が生みだすところ

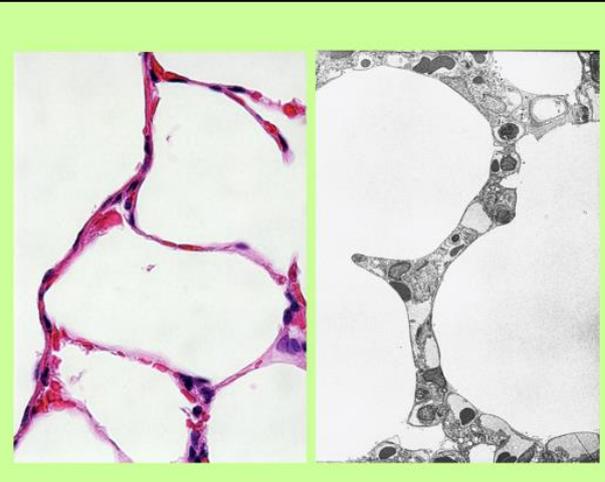
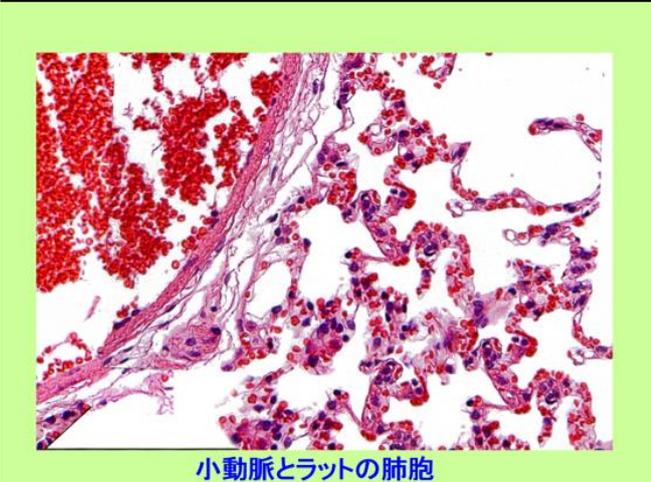
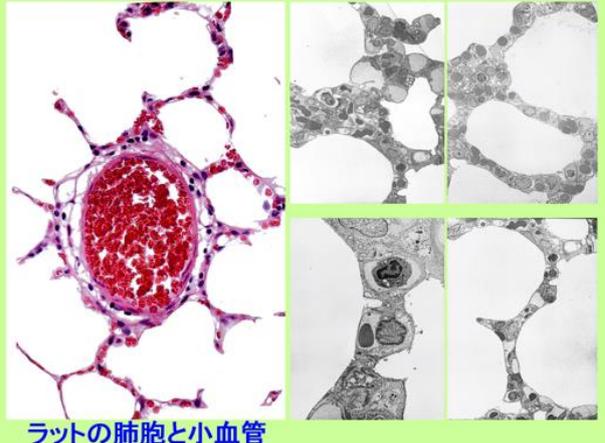
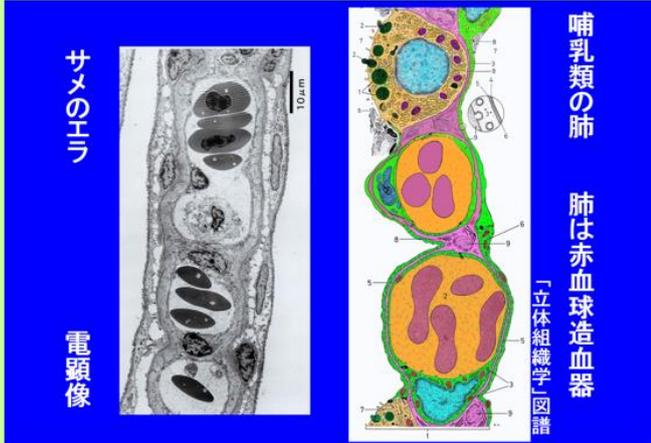
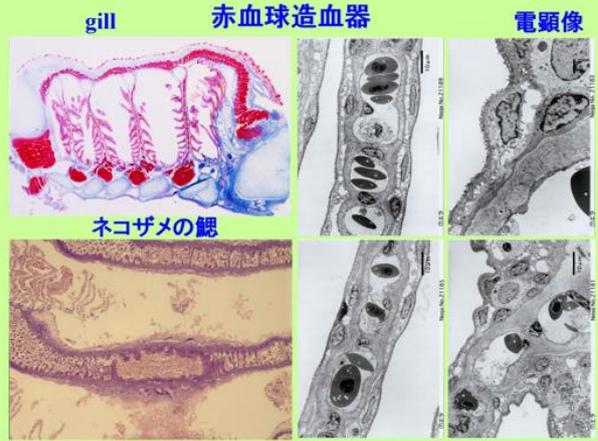
目種動物のオゾンAanhu(海胆) 厚皮動物 動物オゾン

一日以和為貴無奸為
常人此自愛亦少違者
是以或不順君父年違
千隔里然上和下睦路
於論事則專理自通
何事不成
二百箇敬三寶者佛法
僧也則四生之終歸萬國
之極字何世何人非貴
是法人群尤惡能教徒
之其不歸三空何以直狂
三百承詔火理者則天之
臣則地之天寶地戰時
鳴行乃氣得通地戰覆天
則致環牙足以居臣承
上行下履故承詔火順
不謹自敗

至手次敬文文山乃種原乃
日知之御世從阿札產師神之辰
櫻木乃弥維爾尔天下所知
食之乎天尔滿傳乎重而
青丹吉山山乎野何方如余食
可天離者離列足是海田
乃樂浪乃大洋宮尔天下所知
食兼天皇之神御言能大宮
看此爾等雖云春草之茂生有
霞立春日之霧流百城之
大宮及見之卷毛

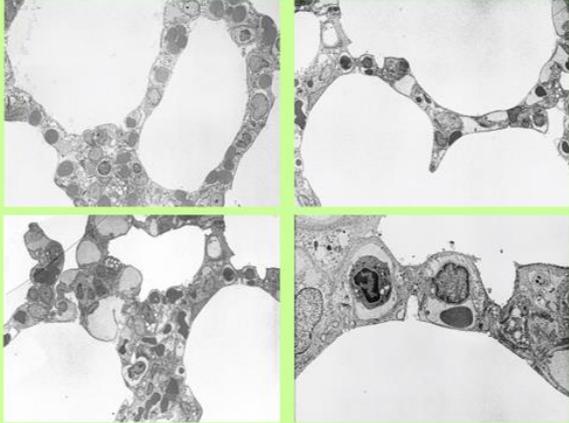
染波之思實乃乎母雖有本宮
人之相麻知兼淨





標本の成果

ラット(肺)電顕

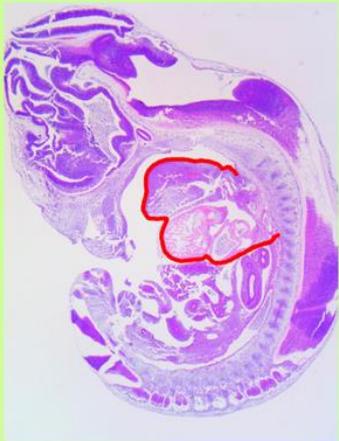


体の構造と重力を良く知る

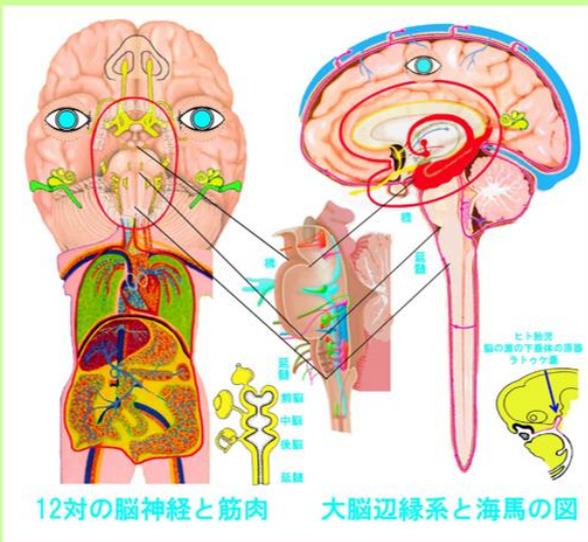
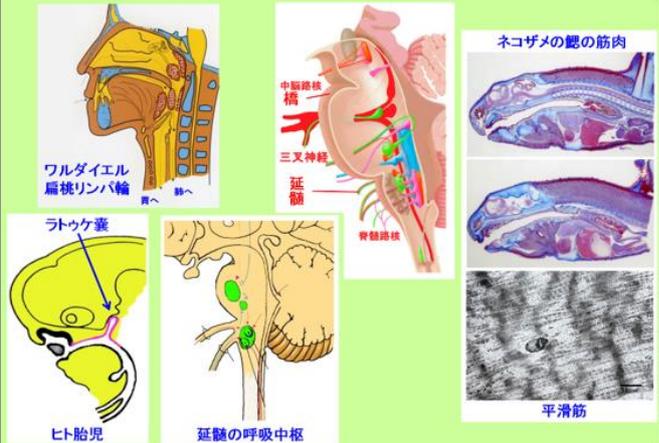


舌と心臓は上陸前の動物と哺乳類の胎児では一体として繋がっている

哺乳動物の胎児



舌と心臓は羊水中の胎児は一体として繋がっている



12対の脳神経と筋肉

大脳辺縁系と海馬の図

重力進化学著書の準備



- ① 重力とは何か？
- ② 光とは何か？
- ③ 熱力学とは何か？